

機関番号：34533

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520015

研究課題名（和文） 自然の資本化に関する現象学的研究-「持続可能な開発」の倫理に向けて

研究課題名（英文） Phenomenology of capitalization of nature- Toward ethics of sustainable development

研究代表者

紀平 知樹 (KIHIRA TOMOKI)

兵庫医療大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：70346154

研究成果の概要（和文）：

研究課題では、現象学的手法を用いて持続可能な開発の倫理のための基盤を形成することを目的としている。そのために本研究課題では、持続可能性という概念の意味を明らかにすることに取り組んだ。ことに、経済学における持続可能性に関する論争をたどることによって、新古典派の理論を土台にした持続可能性の理解の限界と、サブシステムな意味での経済のあり方がオルタナティブな持続可能性概念の基盤として考えられることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to lay the foundation of ethics of sustainable development with a method of phenomenology. In order to achieve this aim, I deal with clarification of the concept of sustainability. I elucidate the limitation of sustainability that is based on the neo classical theory. And I point that the other possibility of sustainability is in the subsistent meaning of economy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：環境倫理学

1. 研究開始当初の背景

(1) 環境問題の解決のための取り組みは、外部不経済の内部化という仕方で行われている。すなわち市場経済の枠組みを用いて環境問題を解決する方が大きな役割を果たしている。そしてその中心にあるのが費用便益分析であるといえるだろう。そのような分析手法をとるなら、まず自然は経済的価値へと還元されなければならないだろう。

(2) 本研究では、上で述べた事態を「自然の資本化」と見なし、フッサールが、近代科学による「自然の数学化」を批判した分析を援用しつつ、環境問題、特に持続可能な開発という理念に新たな光を当てる。

(3) また、持続可能な開発の理念については、経済学において強い持続可能性と弱い持続可能性の議論が行われており、この問題に哲学/倫理学の立場から考察する。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、資本化された自然を相対化するための視座を得ることである。そのために、市場経済の成立とその帰結を明らかにする。

(2) アマルティア・センは新古典派経済学の理論的な前提である経済人を合理的な愚か者と性格づけ、共感に対するコミットメントの重要性を論じているが、現象学の手法を用いて現在の経済学の主流である新古典派経済学による経済の価値づけを相対化する。

(3) 現在の環境問題の経済的解決にとっての中心概念である外部不経済の内部化は自然の価値を貨幣価値へと還元することによって成立するが、そうした還元がどこまで可能か、またそうした還元によって何が取り残されてしまうのかということ明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、主として文献研究を通して行われた。まず初年度は、研究課題にも掲げているように、現象学の手法をいかにして経済学へと適用するかということをつッサールの著作、特に「自然の数学化」を論じた『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の読解を通じて考察した。

(2) 二年目はいかにして、自然が資本化されていったのかということ、経済思想の歴史の面から検討した。またそうした資本化がまずは労働と結びつけられていたのに対して、経済そのものが自律化するために、限界効用革命は必要であったことを、主としてカール・メンガーの著作を読み解くことで確認した。最終年度も同様に文献研究を通して研究を行った。とくに持続可能性という概念を新古典派とは異なる経済の意味から基礎づける研究をカール・ポランニーやハイエクらの思想を検討した。

4. 研究成果

(1) 本研究は、現象学の方法を用いて環境問題を考察し、持続可能な開発に関する倫理の構築への土台を形成することを課題としている。もちろん、環境問題といっても、きわめて多様であり、一つの方法でそのすべてを隈無くくみ尽くすことは不可能であろう。しかし、環境問題についてすでにたびたび述べられているThink globally, act locallyとい

う標語をある意味では体現しているのが現象学という哲学であるともいえる。なぜならフッサールが始めた現象学は、ある普遍的なものが、現実の個別的な経験からいかにして、その普遍性をえるかというその過程を明らかにしようとする試みであるからだ。

環境が危機に瀕しているということはもはや言い尽くされた感もあり、私たちは毎日のように自然/環境が破壊されていく様子をテレビや新聞インターネットを通して目にしている。そしてそういった危機への対応も様々なかたちで行われているということを見聞きする。しかしそれにもかかわらず個人レベルで見ると、報道されているほどの危機を(日本、あるいは先進国に住む)私たちが身近に感じることはまれではないだろうか。しかし、地球温暖化や生物多様性の喪失といった問題の原因をたどっていけば、私たちの普段の生活とも密接に関わっていることが明らかになるだろう。

現在のグローバル化した世界では、そうしたつながりが非常に見えにくくなっている。たとえば、今日の夕飯に食べた食材がどこで、どのようにして作られ、そしてどのような経路を経て目の前のテーブルの上に置かれているのかを私たちはほとんど何も知らない。またコーヒーは南北の経済格差を象徴する作物だといわれることもあるが、私たちの多くは、一杯のコーヒーを飲む際にそのようなことを考えることはそれほど多くないかもしれない。そうしたつながりを再認識するための方法として、現象学の手法が有効であることを確認した。

(2) フッサールは、彼の最後の著書『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』において当時隆盛しつつあった自然科学に対する批判を行っていることはよく知られている。その際、彼が学問の危機と考えていたのは学問が経験から遊離し、記号の操作になってしまっていること、そしてそのように記号化された世界を現実の世界と取り違えてしまうことであった。そうした経験と学問の乖離に大きな役割を果たしているのが数学であった。

フッサールによれば、自然が数学化されることによって、自然自体が経験的世界と断絶し、理念化されてしまったというのである。そうした断絶を修復するために、彼は生活世界や経験を学問の基盤として考えたのである。このフッサールの考察は、本研究の最初のステップとしてきわめて重要であることを明らかにした。

しかし現在の環境問題の取り組み、特に経済的手法による取り組みは自然をたんに数値化するのではなく、むしろ資本化しているものであり、自然の経済的価値の問題を視野に入れなければならない。その点において、フッ

サールの現象学は、環境問題の分析に関していまだ十分な視座を手に入れていないということを示した。

(3) このような状況において考えるべきなのは、自然が数学化され、私たちの経験から乖離してしまったことに対する批判ではもはやなく、自然の数学化を土台にして、自然が経済化されているという事態である。そして、そうした経済現象を現象学の立場から批判的に考察するための地盤が必要である。

近年の現象学に関する研究のうち、とくにエコフェノロジーといわれる研究では、経験への還帰という点で環境倫理の思想と現象学の近さを議論しているが、彼らもまた自然科学の批判にとどまってしまう。すなわち彼らによれば、科学的自然主義は価値や使用を主観的なものとして切り捨てたことを批判している。そのこと自体はひとまずは妥当であるが、自然科学を範とする経済学においては、そうしたものが客観化、理念化されているということを実をとしている。従って、現象学が環境問題を十全に論じるためにはそのような理念化された価値を批判しなければならないことを明らかにした。

(4) この研究においては、上で述べた自然を理念化された価値において評価するような事態を「自然の資本化」と名付け、それがどのような由来をもつのか、そして環境問題を解決するにあたってどのような意味を持つかということ考察してきた。特に、ロックの所有権に関する理論からはじまる労働価値説の中で、土地が経済システムに組み込まれていくことと、また貨幣を介した交換のシステムが確立していくことを確認した。また19世紀にメンガー、ワルラス、ジェボンズらによる限界効用の概念によって、経済学は新たな局面を迎えるが、それと同時に効用を媒介とした等価交換のシステムが確立したことを明らかにした。

(5) 上記のような経済学の理論的枠組みにおいて、持続可能性に関する強・弱の議論も行われている。弱い持続可能性の解釈においては、自然資本と人工資本が交換可能なものと見なされているが、それはまさに二つの資本が効用という共通尺度によって評価されることで交換可能となる。強い持続可能性の解釈は、確かに自然資本と人工資本を交換可能性ではなく、むしろ補完的な関係にあるとしているが、しかしやはりこの強い持続可能性の解釈もまた、自然物と人工物を資本という次元においてみている以上、弱い持続可能性と同じく経済的な枠組みを出ていないということを示した。

(6) こうした主流派の経済学による理論に対する批判として、メンガーの後期の経済財の二つの方向に関する議論と、それに影響を受けているカール・ポランニーの経済の二つの意味に関する考察を行った。

彼らはともに、市場での交換ではなく、むしろ人と自然との関わりを経済過程とみようとしていた。特にポランニーは、市場経済の歴史的な研究をとして、それが必ずしも経済の唯一のあり方ではないことを明らかにしている。そして市場が社会から離床し、社会の付属物から、逆に社会をものみ込むようなシステムになっていくことを明らかにしている。これはフッサールの自然の数学科の考察と類比的に考えることができる。そしてポランニーは、人間と自然環境との制度化された相互作用を経済のサブシステムな意味として示しているが、ここに市場経済とそれによる自然環境の評価を相対化するための可能性を見出すことができることを明らかにした。

(7) そしていわゆる市場経済的な価値と、そうではないサブシステムな意味での経済的な価値との比較から、持続可能性に関する新たな解釈をさぐることが今後の課題として残されている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

- 1 紀平知樹、自然の資本化-エコ・フェノロジーのための予備的考察、『平成 20 年度～22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 自然の資本化に関する現象学的研究-「持続可能な開発」の倫理に向けて、査読なし、2011 年、23 頁～38 頁
- 2 紀平知樹、経済の二つの意味：稀少性だけが経済的価値を生み出すのか?、『平成 20 年度～22 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書 自然の資本化に関する現象学的研究-「持続可能な開発」の倫理に向けて、査読なし、2011 年、39 頁～56 頁

[学会発表] (計 3 件)

- 1 紀平知樹、持続可能な開発とニード、日本倫理学会第 61 回大会ワークショップ「持続可能性」の基盤と射程、慶應義塾大学、2010 年 10 月 8 日

- 2 紀平知樹、人工資本と自然資本の代替可能性-価値の通約不可能性、応用哲学会第二回年次研究大会、北海道大学、2010年4月24日
- 3 紀平知樹、Nanotechnology and Environmental Ethics, IV JAPANESE-FRENCH SYMPOSIUM on BIOETHICS and ETHICS of SCIENCE, 西南学院大学、2009年4月18日

〔図書〕(計 2件)

- 1 紀平知樹、行為としての哲学、『ドキュメント臨床哲学』、大阪大学出版会、2010年、188頁～212頁
- 2 紀平知樹、知識の委譲とリスク社会、『講座哲学 知識/情報』、岩波書店、2008年、35頁～55頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

紀平 知樹 (KIHIRA TOMOKI)

兵庫医療大学・共通教育センター・准教授

研究者番号：70346154